教 授　**本田　洋**　HONDA, Hiroshi

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~hhonda/

## 1. 略歴

1986 年 3 月　東京大学教養学部教養学科第一文化人類学分科卒業
1986 年 4 月　東京大学大学院社会学研究科文化人類学専修課程修士課程入学
1988 年 3 月　同上　大学院社会学研究科修士課程修了
1988 年 4 月　同上　大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
1988 年 8 月　文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991 年 5 月）
1993 年 3 月　東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
1993 年 4 月　日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994 年 3 月）
1994 年 4 月　東京大学教養学部助手（～1996 年 3 月）
1996 年 4 月　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000 年 3 月）
1999 年 8 月　韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所常勤研究員（～2000 年 8 月）
2000 年 4 月　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002 年 3 月）
2000 年 9 月　英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001 年 3 月）
2002 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016 年 4 月　東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
2019 年 3 月　韓国全北大学校人文大学訪問研究者（～2019 年 10 月）

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

社会・文化人類学

### b 研究課題

韓国朝鮮社会を主たる対象として，社会・文化人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より 30 年余りのあいだ，韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており，他の地域でも短期の調査を重ねている。近年の研究課題は，(1) 産業化後の韓国社会における農村移住（都市居住者の農村地域への移住。韓国では「帰農」・「帰村」と呼ばれる），(2) 韓国の「マウルづくり」活動／支援事業とローカル・コミュニティの再編成，(3) ポストモダン的状況におけるローカル・コミュニティの再編成に関する理論的研究，(4) 1990 年代以降の韓国社会における墓と死者の祭祀・追慕の変化（東アジア諸社会における少子化と父系理念の再構築についての比較研究の一環として），(5) 日本の人類学における韓国社会研究の回顧・展望と方法論の再検討，等である。

### c 概要と自己評価

研究課題(1)については，2007 年 3 月に予備調査を開始し，2010 年 8 月から韓国全羅北道南原市山内面と近隣地域で，移住者とコミュニティ運動の指導者・活動家を対象としたインタビュー調査と参与観察を断続的に行ってきた。当該年度においては，民族誌的調査研究を継続するとともに，農村移住者の生き方の再構築とコミュニティ形成の過程にみられる「農村」の資源化と農村性（ruraity）の再構築に着目して資料の一部を分析しなおし，研究論文「農村移住を契機とする生き方の転換――現代韓国社会における農村の資源化に関する試論」（2019 年）として公開した。研究課題(2)については，全羅北道南原市を対象として 2018 年 8 月に予備的調査を実施し，2019 年 5 月～10 月の韓国滞在中に全羅北道南原市，全州市，完州郡，長水郡等で現地調査を実施した。その成果の一部は学会発表等を通じて公開した。研究課題(1)・(2)の民族誌的研究を基盤として，研究課題(3)のローカル・コミュニティの理論的再検討にも取り組みつつあり，その成果の一部を「課題としての対照――韓国の「共同体」（コンドンチェ）に関する民族誌的考察」（2019 年）として公開した。研究課題(4)については，台湾・中国・沖縄研究者等との共同研究（科研費基盤（A））の一環として取り組んでおり，2018 年 8 月と 2019 年 12 月に現地調査を実施した。これについては共同研究会での発表等を通じて成果を取りまとめつつある。最後に研究課題(5)については，2018 年 11 月の公開シンポジウムでの招聘発表と，その成果に基づいて書き下ろした研究論文「1970 年代以降の日本の人類学における韓国社会研究」（2020 年）等の形で研究の深化を試みた。総括すれば，従来の研究課題をさらに進展させる一方で，「マウルづくり」や墓・祭祀の変化などの新たな課題にも着手し，また，民族誌的研究だけでなく，理論的視角の深化・洗練においても着実な進展を示していると自己評価できる。以上の研究成果の達成が，相当程度において，2019 年 4 月～2020 年 3 月の特別研究期間の取得によって可能になったことについても付言しておきたい。

**d　主要業績**

**(1)　論文**

本田洋、「共同体（コンドンチェ）を考える――二編の民族誌から」、『韓国朝鮮の文化と社会』、17、154-165 頁、2018.10

本田洋、「農村移住を契機とする生き方の転換――現代韓国社会における農村の資源化に関する試論」、『朝鮮学報』、249・250 合併号、1-33 頁、2019.1

本田洋、「課題としての対照――韓国の「共同体」（コンドンチェ）に関する民族誌的考察」、『韓国朝鮮文化研究』、19、25-48 頁、2019.9

本田洋、「1970 年代以降の日本の人類学における韓国社会研究」、『年報人類学研究』、10、30-49 頁、2020.3

**(2)　学会発表**

国際、本田洋、「農村移住を契機とする生の転換：韓国農村民族誌を超えて」（韓国語）、韓国文化人類学会 60 周年記念学術大会「韓国を超えて，人類学を超えて」、ソウル大学校グローバルコンベンションプラザ、2018.6.8

国内、本田洋、「研究構想」、「少子化に揺れる東アジアの父系理念――祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」2018 年度第 1 回研究会、慶應義塾大学三田キャンパス、2018.7.8

国内、本田洋、「1970 年代以降の日本の人類学における韓国社会研究」、南山大学人類学研究所 2018 年度第 2 回公開シンポジウム「日本と韓国の人類学ネットワーク」、南山大学、2018.11.18

国内、本田洋、「2018 年度研究報告」、「少子化に揺れる東アジアの父系理念――祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」2018 年度第 3 回研究会、静岡大学静岡キャンパス、2019.2.26

国際、本田洋、「韓国の共同体作りに関する社会人類学的試論：全北南原地域の事例を中心に」（韓国語）、成均館大学校東アジアフォーラム、韓国成均館大学校、2019.9.20

国際、本田洋、「共同体の発見：全北南原の共同体作り」（韓国語）、2019 年度韓国文化人類学会秋季研究大会、韓国安東大学校、2019.11.1

国内、本田洋、「家族を交渉する家族：現代韓国における祭祀実践」、第 6 回「少子化に揺れる東アジアの父系理念」科研研究会、立教大学池袋キャンパス、2020.2.27

**(3)　会議主催（チェア他）**

国際、日本文化人類学会・韓国文化人類学会共催連続セッション「自分の言語で人類学すること」弘前ラウンドテーブル、タスクフォース、日本文化人類学会第 52 回研究大会、弘前大学、2018.6.2

国際、日本文化人類学会・韓国文化人類学会共催連続セッション「自分の言語で人類学すること」ソウルラウンドテーブル、タスクフォース、韓国文化人類学会 60 周年記念学術大会「韓国を超えて，人類学を超えて」、ソウル大学校グローバルコンベンションプラザ、2018.6.9

**(4)　教科書**

『社会学概論 2018』、赤川学他、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2018

『社会学概論 2019』、赤川学他、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2019

**(5)　研究テーマ**

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（A）、研究分担者（代表者は東大外）、「少子化に揺れる東アジアの父系理念――祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」、2018～

日韓文化交流基金派遣フェローシップ、「現代韓国の地方社会における共同的活動の創出と生活の場の再編成に関する社会人類学的研究」、2019.5～7

## 3.　主な社会活動

**(1)　学会**

国内、朝鮮学会、幹事・編輯委員、2018.4～2020.3

国内、韓国・朝鮮文化研究会、運営委員・庶務責任者、2018.4～2020.3

国際、『比較文化研究』（韓国ソウル大学校社会科学大学比較文化研究所・韓国語）、編集委員、2018.4～2020.3

国際、*Korean Anthropology Review* (Seoul National University)、Editorial Board、2018.4～2020.3